

報恩謝徳

報恩講

報恩講の営まれる時が来ました。寺にも家々にも、例年の如く、懐しくも有難い報恩講が、秋から冬にかけて営まれます。子供の頃には、秋の取り入れがすんで霜が下りる頃になると、わけもなく、報恩講が待たれたものであります。その頃は、近所へおよばれすることや、人が集ることや、御馳走が頂けること等が嬉しかったのですが、しかし、何時しかに、子供心に、報恩講というものに対する懐しさを、根強く植付けられて来ていたものが、今、本質に報恩講の営みの底に流れるものに解れなければならなくされたことは、有難いことであります。まことに心から、報恩講をつとめさせて頂きたいものであります。

蓮師の勸誡

それにつけても頂かねばならぬことは、蓮如上人の厳しいみ教であります。かの六箇条の御文章には、

「一。近年は、仏法繁盛とも見えたれども、まことにもて坊主分の人に限りて信心のすがた一向無沙汰なりと聞えたり、以てのほか嘆かはしき次第なり。」

一。末々の門下の類は他力信心のとほり聴聞のともがらこれ多きところに、坊主よりこれを腹立せしむる由、聞えはんべり、言語道断の次第なり。」

この二ヶ条、まことに以て、今も昔も変わりなく、嘆いてもく／＼なげかわしきことでもあります。門徒が真に念仏すれば、坊主が腹を立てるとのお嘆き。八ヶ条の御文章にも、

「一。近年仏法の棟梁たる坊主達、我が信心は極めて不足にて、結句門徒同朋は信心は決定するあひだ、坊主の信心不足の由を申せば、以ての外腹立せしむる條、言語道断の次第なり、己後に於ては師弟子ともに一味の安心に住すべき事。」

とあります。頂戴すべきであります。法の魔障であり、仏の怨敵であります。悲しいことでもあります。

酒

「一。坊主分の人、近頃はことのほか重杯の由、その聞こえあり、言語道断然るべからざる次第なり。強^{あなが}ち酒を飲む人を停止せよと言うにはあらず、仏法につけ門徒につけ重杯なれば、必ず動もすれば酔狂のみ出来せしむる間、しかるべからず。さあらん時は坊主分は停止せられてもまことに興隆仏法ともいひつべき歟、然らずば一盞にても然るべき歟。これも仏法に志の薄きによりての事なれば、これを止まらざるも道理か、深く思案あるべきものなり。」

まことに相すまない御心痛をおかけしたものであります。誰も彼も、この御文を凝視させて頂きましょう。「坊主分は停止せられてもまことに興隆仏法ともいひつべき歟。」大酒のやまないのも道理、「仏法に志の薄きによりての事」痛いお言葉でありま

す。やめられるものはやめさせて頂きましょう。やめられぬ者は一盞にとゞめましょう。

眞の報恩

「この故に、七昼夜の時節に相当り、不法不信の根機に於ては、往生浄土の信心獲得せしむべきものなり。これ併しながら今月聖人の御正忌の報恩たるべし。」

これが報恩講において第一に心がくべきことであります。八箇条の中にも、「一。この七箇日報恩講中に於ては、一人も残らず信心未決定のともがらは心中を憚らず、改悔懺悔の心を発して、眞実信心を獲得すべきものなり。」とあります。

信心獲得することは、そのまま報恩謝徳の生活が成就することであり、念仏は報恩謝徳のすべてであります。信心とは、如来の大慈悲に摂取せられて、大慈悲に生かされることであり、如来の智慧光に無明を照し破られて生かされることであり、心の底から満足感謝して、滅びざる幸福の身にして頂くことであり、我の暗い生活から、無我の明るい生活に入らせて頂くことであり、邪見憍慢の悪衆生が邪見憍慢を邪見憍慢と知らされて、合掌して頭を下げて生かされることであり、道のなかつた者に、眞実の無上道を恵まれることであり、外に享樂ばかり求めていた者が、内に満足して大法を頂く身にされたのであり、闇を造る中心が光の中心に、愚痴の魂が懺悔感謝の身に、不忠不孝の子が、国の御恩に目覚めて生きる身にして頂いたのであります。

そうした一切は、如来回向の大信に孕まれています。でありますから、如来の功德を頂くことをやめて、報謝に出かけるのではなくて、頂いてゆくまゝが報謝であります。一番に頂く人が一番の報謝の人であります。「信心獲得せよ、信心決定せよ。み法を聞けよ」との御親切は、地上最大の御親切であります。頂くままが報謝とは何と云う有難いことでありましょう。如来浄土の清浄功德は、念仏の人を通してこの世界の光となり、徳となり、道となり、力となつて下さるのであります。

日本は有難いみ国であります。尊い国とは、それ自体尊いが故に、尊いものを摂取し、尊いみ法に依つて尊くなり、永遠に尊いものを發揮することであり、日本のお国は悪いもの、邪なもの、毒になるものは、これを受け付けないで、持つて来ても、それを排除します。尊い国にあつても、尊い法に生きねば、お国を穢すだけでなく、尊いお国の中にすら落ち着けないで、暗い心で愚痴に泣くことであります。報恩講に当つて、廣大なる皇恩の思われることであります。